

第1部 創作昔ばなし

常田富士男賞

ねつをだしたおっとう

細江 隆一

一
むかし、むかし、あるところに、せいたというおとこのこがおった。

せいたは、おっとうとふたりですんでおった。おっかあは、とうのむかしにしんでしまって、ふたりでくらしとった。

せいたは、おっとうがだいすきやった。ひまさえあれば、おっとうにくつついとった。

そやから、むらのこどもたちからも、ばかにされとった。

「やーい、せいたのあまえんぼう」

「ちがうわい。おっとうがしんぱいやから、ついてつとるだけやい」

せいたは、いいかえしたけれど、ほんとうのきもちではなかつた。はずかしかったから、いいわけしただけやった。

おとこふたりだけやから、おっとうもせいたをかわいがった。

おっとうには、こどもがひとりだけやったから、あたりまえやった。

「せいた、きをつけていくんやぞ」

「せいた、あめふつとるで、みのがさをかぶっていくんやぞ」
なにかというと、「せいた」「せいた」と、せいたのことばかりしんぱいしとった。

とくに、おっかあがなくなつてから、おっとうは、ますますせいたをかわいがった。

おっとうとせいたのことは、むらじゅう、しらんものはおらんかった。

「おっかあがしんでしまって、さみしいんやろうな」

むらびとはみんなそういつて、ふたりがなかようするのを、あたたかいめで、みまもつとった。

二

あるひのことやった。

おっとうがとつぜん、ねつをだした。ふらふらで、たつとるこどもできんほどやった。

「せいた、おっとうはちよつとねつがあるで、はようねるわ」
ふとんをしいて、よこになったおっとうは、みるからにしんどそうやった。

「だいじょうぶか、おっとう」

「しんぱいすんな。だいじょうぶや。こうやってねとけば、そ

のうちよくなるわい」

おっとうはねむってしもうた。

せいたはしんぱいやったから、おっとうのおでこに、てぬぐいをおいた。おっとうのおでこにさわると、ものすごくあつかった。

それだけでせいたは、どきどきした。

(おっとうがしんでまったらどうしよう)

せいたは、いてもたってもいられんようになった。

となりのいえにはおばあさんが、ひとりですんでおったから、そこにかげこんだ。

「ねつをだしたんか。しんぱいやな。やまをひとつこえたむらに、いいおいしやさんがいるらしいが、ここからだとおいし。

とちゆうには『やまんば』もおるといふしな」

それをきくと、せいたはこころをきめた。

「おばあちゃん、おっとうをみといてくれ。おら、おいしやさん、よんでくるぞ」

ちよつとまちや、というこえをふりきり、せいたはやまにむかって、はしりだした。

まんげつが、よぞらにかがやいているばんのことやった。

三

さいわい、つきあかりがあつたから、やまみちはわかつた。

けれど、やまおくにはいると、「こなきやよかつた」とおもつた。

たちどまると、ホーホーとぶくろうのこえ。かぜがふきぬけると、きがざわざわとおとをたてる。どこからか、ウオーウオーとおおかみのさけぶこえ。しかも、「やまんば」もいるという。

せいたは、かえろうか、どうしようか、まよつた。けど、おっとうのためや、とおもいなおし、そのまますすむことにした。

しばらくは、なにもなかつた。

つきあかりもとどかないみちにきたころ、とつぜんめのまえに、なにかがあらわれた。

「まてい」

「うわっ」

「ここからさきは、とおさん」

くらやみから、こえがとどいた。

じぶんよりせのたかいばけものに、せいたはからだがふるえてしかたがなかつた。

どうしよう、とまよつた。

けど、めをつむり、「おっとうをすくうためや」とじぶんにいいきかせた。

「とおしてくれや」

「なんで、とおりたいんや」

「おっとうが、ねつをだしたんで、おいしやさんをよびたいんや」

「ほほう。いいやろ。とうしてやろ」

「ほんとか」

「ただし、じょうけんがある。おまえのかみのけをはんぶんよこせ」

せいたは、おもわず、じぶんのかみのけにてをやった。

まだ、かみのけはふさふさしていた。

四

せいたは、けつきよく、かみのけをはんぶん、「やまんば」にやった。みぎはんぶんをやったから、あたまのひだりはんぶんしか、かみのけがなかった。

「やまんば」が、かみのけにさわったら、ごそつとぬけた。ふしぎやったけど、そのまませいたは、やまをのぼり、くだった。

はようおいしやさんをよびたかつたんや。

やまをこえて、おいしやさんのいえについた。

よなかやったけど、せいたはとをどんどんたいいた。しばらくたたくと、なかがあかるくなり、がらつとあいた。

「なんや、こんなよなかに。うわつ、なんや、せいた、そのあたまは」

おいしやさんは、せいたのあたまをみて、たまげてしまった。

「せんせい、たのんます。おつとうが、しにそうなんや」

「なんやて。それはいかん。すごいこう」

せいたは、おいしやさんをつれて、おつとうのもとにいそいだ。

「せいた、おまえ、もしかして『やまんば』にかみ、ぬかれたか」

とちゆうで、おいしやさんがいった。

「はい。そうなんです」

「だったら、かえるとちゆうでも、おんなじめにあうぞ」

「え、なんで」

「あいつは、わかいにんげんのかみのけが、すきやからのう。

ほれつ、わしはそんなしんばいはいらん」

みると、おいしやさんのあたまに、かみのけはいっぽんもなかった。

五

いくときとおんなじだった。

つきあかりもとどかないみちに来たところ、とつぜんめのま

えに、「やまんば」はあらわれた。

「わかった。かみのけやろ。さつさともってけ、このやまんば」

せいたがさげぶと、やまんばのてが、あたまにさわった。おんなじように、かみのけはするつとぬけてしまった。

せいたは、おもわず、じぶんのあたまにてをやった。かみの

けは、いっぽんもなかった。

(おつとうがたすかるんやったら、かみのけなんていらんわ。)

せいたは、おいしやさんのてをひいて、いちもくさんにもどった。おつとうのもとにもどると、そばには、となりのおばあさんがおった。

おいしやさんは、おつとうのみやくをみたり、からだをさわったりしとった。

「こりや、いかん。もうすこしおそかったら、ておくれになるところやったわい。せいた、よびにきてくれてよかった。おつとうは、たすかるぞ」

「おつとうはたすかる」ときいて、せいたはよろこんだ。

おいしやさんは、そのよる、せいたのうちにとまった。おつとうのねつが、たかかったからやった。せいたは、おつとうのそばで、ぐっすりとねむった。

六

よくあき、おつとうのねつはさがった。

「あー、ようねたなあ。からだもかるくなっわ。せいた、ありがとな」

れいをいわれて、せいたははずかしかった。

「せいたがよびにきてくれて、よかったわ。いいむすこさんをもったな」

おいしやさんのことばに、おつとうもうれしそうやった。

ひるごろ、せいたは、おいしやさんをおくっていった。とちゆうで、あのやまをこえたが、「やまんば」はでてこんかった。かえりも、あかるかったせいか、「やまんば」はでてこんかった。

ほっとしたせいたは、それっきり、「やまんば」のことは、わすれてしまつとった。けど、つるつるになったあたまをさわると、「やまんば」をおもいだした。

そのひのよなか、せいたはゆめをみた。

「やまんば」がでてきた。そばには、こどもの「やまんば」もおった。こどもの「やまんば」のあたまには、せいたのかみのけがついとった。くろくろとして、ふさふさで、みるからにかつこうよかった。

「あー、おらのかみのけ、こんなところでやくだったのか。いいよ。おまえにやるよ」

そういうと、「やまんば」のこどもは、へこへこことあたまをさげた。「やまんば」が、かみのけをほしがったわけがわかり、せいたはなつとくした。

あれからずっと、せいたのあたまは、つるつるのままや。けど、せいたはちつともきにしとらん。

「おつとうがげんきになったから、ええんや」といって。